

【飯島周先生追悼文】

飯島周先生追悼

——飯島周先生のお人柄とお仕事——

石川達夫

チェコはヨーロッパの中心・中央 (střed/center) にある中欧 (střední Evropa/Central Europe) の国だが、外国語と言えは英語中心の日本でチェコ語をやっている人にはエクセントリック (výstřední/eccentric)、つまり中心から外れた人が多い。それで、時として奇矯な振る舞いをする人もいるようだ。

そういったチェコ関係者が少なくない中で、飯島先生は珍しく温厚な英国風紳士で、(学者の中では珍しく?) 誰に対しても分け隔てなく接する方だった。それは、先生がもともと英語を研究されていたことと関係があるかもしれない。

先生は、プラーク学派に属していた英語学者マテジウスとヴァヘクが書いた『機能言語学——一般言語学に基づく現代英語の機能的分析』という本も翻訳されている。先生は、プラーク学派の言語学、特にマテジウスに関心を抱いてチェコ語を始めたのだろう。aktuální členění větné (英: functional sentence perspective. いわゆるテーマとレーマの問題) に関心があったようだ。

ロシア語・ドイツ語・フランス語からチェコ語 (やポーランド語) に外れる人はいるが、飯島先生のように、元々英語を専門としていたのにチェコ語 (やポーランド語) に外れた人は非常に珍しい(飯島先生以外にはいないのではなからうか)。このことは、英語中心の日本にとってかなり特徴的なことであるし、飯島先生の稀有さを示すことでもある。

英語から外れてチェコ語・チェコ文化に「のめり込んだ」飯島先生は、翻訳の仕事がお好きで、ほぼ恒常的に翻訳をされ、多くの訳書を世に出された。下記のように、1970年(先生は1930年生まれなので、40歳の時)に最初の訳書を出され、それから2000年に70歳で跡見学園女子大学を定年退職されるまでの30年間に21冊、その後更に90歳でお亡くなりになるまでの約20年間に9冊、計30冊の訳書(共訳含む。後から文庫などとして再版されたものや、アンソロジーの中のもの除く)を出され、更に晩年に1冊の著書を出された。

1. アントニーン・リーム『三つの世代』みすず書房、1970年。
2. ヴィレーム・マテジウス、ジョセフ・ヴァヘク編『機能言語学——一般言語学

- に基づく現代英語の機能的分析』桐原書店、1981年。
3. F・R・パーマー『英語の法助動詞』桐原書店、1984年。
 4. ヤロスラフ・サイフェルト『詩集 ヴィーナスの腕』桐原書店、1986年。
 5. 同『マミンカ おかあさん』恒文社、1989年。
 6. バーツラフ・ハヴェル（千野栄一、飯島周編訳）『ビロード革命のころ——チェコスロバキア大統領は訴える』岩波書店、1990年。
 7. 同（飯島周、石川達夫、関根日出男共訳）『反政治のすすめ』恒文社、1991年。
 8. J・プラットほか『新英語の実相』松柏社、1991年。
 9. カレル・チャペック『いろいろな人たち——チャペック・エッセイ集』平凡社ライブラリー、1995年。
 10. 同『ホルドゥバル』（チャペック小説選集第3巻）成文社、1995年。
 11. ヴァーツラフ・ハヴェル『プラハ獄中記——妻オルガへの手紙』恒文社、1995年。
 12. カレル・チャペック『イギリスだより』（カレル・チャペック・エッセイ選集2）恒文社、1996年。
 13. 同『犬と猫』（カレル・チャペック・エッセイ選集3）恒文社、1996年。
 14. 同『流れ星』（チャペック小説選集第4巻）成文社、1996年。
 15. 同『未来からの手紙——チャペック・エッセイ集』平凡社、1996年。
 16. 同『チェコスロヴァキアめぐり』（カレル・チャペック・エッセイ選集1）恒文社、1996年。
 17. 同『園芸家の一年』（カレル・チャペック・エッセイ選集4）恒文社、1997年。
 18. 同『スペイン旅行記』（カレル・チャペック・エッセイ選集5）恒文社、1997年。
 19. 同『新聞・映画・芝居をつくる』（カレル・チャペック・エッセイ選集6）恒文社、1997年。
 20. 同『平凡な人生』（チャペック小説選集第5巻）成文社、1997年。
 21. ヤロスラフ・サイフェルト（飯島周、関根日出男共訳）『この世の美しきものすべて』恒文社、1998年。
 22. ヨゼフ・チャペック『人造人間——ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』平凡社、2000年。
 23. ヤロスラフ・ハシェク『不埒な人たち——ハシェク風刺短編集』平凡社、2002年。
 24. ヨゼフ・ラダ絵、イジー・ジャーチェク文『どうぶつだいすき』平凡社、2005年。
 25. カレル・チャペック『こまった人たち——チャペック小品集』平凡社ライブラリー、2005年。
 26. 同『北欧の旅』（カレル・チャペック旅行記コレクション）ちくま文庫、2009年。
 27. 同『絶対製造工場』平凡社ライブラリー、2010年。
 28. 同『オランダ絵図』（カレル・チャペック旅行記コレクション）ちくま文庫、

2010年。

29. ボフミル・フラバル『嚴重に監視された列車』（フラバル・コレクション）松籟社、2012年。
30. 飯島周『カレル・チャペック——小さな国の大きな作家』平凡社新書、2015年。
31. ヨゼフ・チャペック『ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』平凡社ライブラリー、2018年。

このように、飯島先生の訳業にはカレル・チャペックの作品、中でもエッセイ（旅行記含む）の翻訳が多い。

カレル・チャペックの作品は、日本では『ロボット』（1920年）が既に1924年に邦訳されて以来、戯曲・小説（中でもSF的なものと推理小説的なもの）の翻訳はかなりたくさん行われてきた。しかし、SF的な性格を持つ『ロボット』や『山椒魚戦争』など、同じ作品が何度も翻訳される一方で、全く翻訳されない作品も少なくなかった。その穴を埋めていったのが、一つには成文社から出た『チャペック小説選集』全6巻、それから恒文社から出た『カレル・チャペック・エッセイ選集』全6巻だった。

その後、『カレル・チャペック・エッセイ選集』は文庫化され、更に平凡社ライブラリーとちくま文庫で飯島訳のエッセイ集が次々と出た。ちなみに、戯曲については、田才益夫が『チャペック戯曲全集』（八月舎、2006年）でチャペックの戯曲を全部翻訳した。こうして、カレル・チャペックの作品は、ほぼすべてが日本語に訳された。

新聞社に勤めるジャーナリストであったカレル・チャペックは、折に触れて記事・エッセイを書き続けて、非常にたくさんのエッセイを残した。チェコで出たカレル・チャペック全集全24巻のうち、（旅行記も含めて）エッセイは11巻にも及ぶ（しかもページ数が多く、著作の約半分になる）。飯島先生は、特にこの分野で集中的に翻訳の仕事をしたのである。先生はカレル・チャペックの作品の翻訳を全部で15冊出されたが、そのうち11冊がエッセイである。恒文社のほか、平凡社（ライブラリー）と筑摩書房（文庫）が出した。

チャペック以外の翻訳で主なものとしては、ヤロスラフ・サイフェルトがノーベル文学賞を受賞した後、詩集『ヴィーナスの腕』を翻訳された。この本には、飯島先生と同じ高校（現在の長野高校）出身の有名な画家・作家、池田満寿夫が表紙の絵を描いている。そのほか、詩集『マミンカ おかあさん』、回想録『この世の美しきものすべて』も翻訳された。

そのほか、ビロード革命でヴァーツラフ・ハヴェルが大統領になった後、ハヴェルの著作『ビロード革命のこころ』、『反政治のすすめ』、『プラハ獄中記』を翻訳された。ちなみに、飯島先生の訳書を多く出した恒文社は、かつて東欧文学の翻訳をたくさん出していたが、その活動を停止した。京都の松籟社が東欧文学の訳書を出すようになっ

てから、先生はボフミル・フラバルの『嚴重に監視された列車』も翻訳された。

それから、忘れてはならないのが、カレル・チャペックの兄で、画家・作家・詩人であったヨゼフ・チャペックの作品の翻訳で、『人造人間——ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』と『ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』を、共に平凡社から出された。特に後者は、ナチスの強制収容所で死亡したヨゼフ・チャペック（死亡年不明）が、強制収容所の中で家族（妻と娘）に宛てて書いた非常に印象的な文章や詩を含んでいる。日本では子供向けの絵本作家として、あるいは（チェコ文化にある程度詳しい者にも）画家としてしか知られていなかったヨゼフ・チャペックの知られざる作家・詩人としての面を紹介した点で、重要なものである。同じ2018年には、チェコ・センターや日本の美術館でかなり大きなチャペック兄弟展が開催され、ヨゼフ・チャペックについて日本でもより詳しく知られるようになった。この『ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』が、飯島先生の最後のお仕事（2018年、88歳）となった。

それから、その前に出された著書『カレル・チャペック——小さな国の大きな作家』（2015年、85歳）は、こぶりな新書ながら、一般の人にも読みやすいカレル・チャペックの評伝であり、チャペックの全体的な相貌を紹介した好著である。世界的に見ても、カレル・チャペックの翻訳は非常に多いが、チャペックについての本は少ない中で、飯島先生のこのご著書は、千野栄一先生の『ポケットのなかのチャペック』（1975年）以来、実に40年ぶりに日本で出されたチャペックについての本である。千野先生の本は、折に触れて新聞・雑誌などに寄稿したチャペックについてのエッセイを集めたものなので、日本語で書かれたチャペックの評伝は、飯島先生の本が初めてと言える。

このように、飯島先生は、2000年に70歳で定年退職された後も、自由な時間を謳歌するように、熱心に仕事や活動を続けられた。定年退職後は、故郷の長野県に別荘を購入されて、そこに本を持ち込んで仕事をされていたようだ。今の「ワーケーション」の走りのようなものと言えようか。

先生は高齢になられてもお元気で、他の高齢の先生方がほとんど隠居生活をされているケースが多い中で、会長を務められた当学会や、最期まで長く会長を務められた日チェコ協会や、チェコ大使館の催しにも熱心に参加されていた。そして2009年には、チェコ文化普及の功績によりチェコ共和国の功労賞を受賞された。

今では「人生百年時代」と言われ、生涯仕事を続けることが推奨されているが、それについても先生は先行されていたようだ。残念ながら、百歳ではなく90歳でお亡くなりになったが……。あと10年生きておられたら、もっと仕事をされただろうと思うと、残念である。

飯島先生、たくさんのお仕事をされて、お疲れ様でした。心からご冥福をお祈りします。安らかにお休みください。